



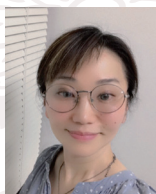
Title	公益財団法人アジア保健研修所 (Asian Health Institute : AHI)
Author(s)	清水, 香子
Citation	目で見るWHO. 2025, 94, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103610">https://doi.org/10.18910/103610</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 公益財団法人アジア保健研修所 (Asian Health Institute: AHI)



## 清水 香子 (しみず きょうこ)

2007年よりアジアの地域開発ワーカーを対象とした参加型研修、元研修生との現地協働事業（カンボジア、ネパール、パキスタン等）を担当。現在、事務局長兼ラーニング事業部門長。

### 1, AHI と「健康」

AHI は 1980 年に愛知県日進市に設立された NGO です。以来 45 年、アジアの人びとが、自分たちで自らの健康を手にする活動を支える、地域のファシリテーターを育成しています。

目指しているのは、「健康」な社会です。誰もが尊重され、公正に、生き生きと暮らせる地域であることを含みます。それが、体や心の健康に不可欠であると考えるからです。

始まりは 1976 年、医師の川原啓美(故人) がネパールの地方の病院で医療協力に携わっていた時の、ある患者との出会いでした。2 年前、些細なことでできた足の傷は、化膿を繰り返し進行した皮膚がんになっていました。足を切断せねばならないと伝えと、彼女はこう答えました。「切らないでください。私は死にます。夫が元気な女性と再婚し、子どもたちを育ててくれるように」。川原は、再発をわかりつつも簡単な処置をするに

とどめ、村へと帰る彼女を見送りました。

彼女はなぜ、ひどくなるまで病院に来なかったのか。なぜ死ぬことを選んだのか——人びとの暮らしを知るため、保健師の村の巡回に同行した川原が実感したのは、病院までの悪路と、徒歩で何日もかかる経済的な負担。出会ったのは、親を手伝いきょうだいの世話のため学校に行かず、幼くして嫁ぐ少女たちや、出稼ぎに出た夫の代わりに、家族の世話と農作業など多くの仕事を担う女性たち。そして想像に難くないのは、この女性たちが足を失えばどこからの支援もなく、いっそう家族を貧しくさせてしまうであろうこと。

川原は、病院で救えない命がどれほど多いかに気づきました。そして、命が守られ健康であるためには、人びとの生活をとりまく、さまざまな社会課題に取り組む必要があると知りました。彼が患者の女性から学んだのは、「健康の社会的決定要因」と言い換えてもよいでしょう。

### 2, 「人から人へ」広がる人づくりと参加型研修

帰国後、川原は AHI を設立しました。健康な地域へと変革しようとする人が学びあい、育ちあう研修所として。その最大の特徴が、参加者が主体となって学びあう「参加型」です。

川原は、健康な地域へと変えるのは、地域の人びとと自身でなければならないと考えました。自分たちの健康は自分たちで守る、そのような村づくりの必要性です。背景には、プライマリヘルスケアの考え方がありました。外部から変えようとするのではなく、住民が変わる力を信じ、その力を培っていかねければ、持続する本当の変化は起きません。ならば、住民一人ひとりが、自分や地域の力に気づき、発揮する、そのプロセスを支える人を育成しよう。

「人から人へ」と広がる変化—これが AHI が行っている「人づくり」です。そ

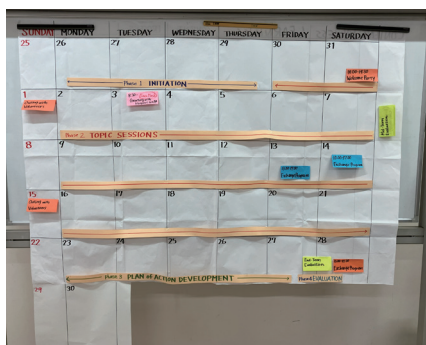


1976年当時のネパール 人びとは何日もかけて、山の上の町の病院まで歩く



川原医師が村で出会った少女





国際研修の日程表 初日は真っ白。  
何を、いつ学ぶかは、参加者が話し合って決めます



最終日の日程表 参加者が議論したトピックでびっしり

して自らの力に気づき育ちあうプロセスを生み出すカギとして、「参加型」を用いています。

AHI は、毎年、国際研修を開催しています。参加するのは、アジア各地で住民自身の活動を支える現地の NGO ワーカーや住民グループのメンバー約 10 名です（2025 年 7 月現在 元研修生総数 24 か国 745 名）。1 か月間、AHI で寝食を共にする合宿型の研修です。

参加者たちの活動は、保健や衛生に限られません。貧困、教育、ジェンダー、差別、環境、障害、多文化共生、平和など、活動地域の人びとが抱える課題によって異なります。また課題への関わり方も、住民ボランティア育成から、多分野連携、ネットワーキング、政策提言まで多様です。自身もマイノリティに属する当事者ワーカーもいます。

このような多様性の一方で、共通していることがあります。どの人も、住民グループづくりと、そのグループのエンパワメントを支援していることです。地域

の人びとが、声を出し、話し合い、課題に気づき、解決に向けて活動する、その活動を支えています。

研修では、まず最初に、参加者自身が研修の時間割やルールを決めます。次に話し合うのは学ぶ目的と内容です。それぞれに異なる経験と課題を出し合い、共通の目標を見つけます。そして、お互いの経験を教材に、何を学んでいくか（内容）を計画します。参加者は担当を割り振りチームを作り、各セッションを企画し、ファシリテートします。

どう学ぶか（プロセス）も大切です。共通語である英語が苦手な人もいます。自分に自信がない人もいます。日々振り返り会を持ち、誰も置き去りにせず、一緒に学ぶ場をどう築くか。助け合い、考え合い、試行錯誤を繰り返しながら進みます。

朝食づくりや掃除といった生活面も参加者が分担して行います。こうした場面では、国・宗教など文化の異なる参加者同士の間で、驚きや摩擦が生じます。そ

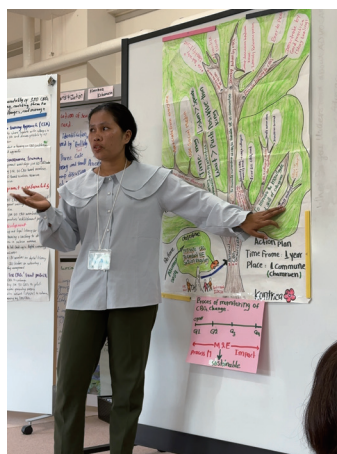
れらをフィードバックし合い、どう乗り越えるかを話し合うことで、自分の価値観を振り返り、違いを受け入れる体験を重ねていきます。

この研修自体が、異なる人びとが集まった、ひとつのコミュニティなのです。参加者は参加型を通し、誰もが尊重され課題解決に向かってともに働くインクルーシブな地域づくりに挑戦します。そして、自分自身や他の参加者の変化と、それがもたらす育ちあう力を体感します。地域を変える参加型の可能性を感じ、帰国後、実践していくのです。

現在 AHI では、研修後の実践から生まれる、参加者同士の更なる学びあいの後押しに、力を入れています。また近年、日本と他のアジア諸国の地域課題とその取り組みは、共通化しています。日本もアジアのひとつとして、日本の地域づくり実践者と、研修の参加者たちが、ともに学ぶ場づくりにもチャレンジしています。ご関心あらましましたら、ぜひご来館ください。研修見学も大歓迎です。



2024年国際研修 問題分析のワークショップ。ブータンのヨンテンさん（右から3人目）は、視覚障害のある当事者ワーカー



2024年国際研修 帰国後の活動計画を発表するカンボジアのコンティアさん。「研修で体験した参加型を用い、住民ボランティア同士の信頼関係をつくりたい！」

\* AHI ウェブサイト  
<https://ahi-japan.jp/>